

フィリップ・ロスの『私は共産主義者と結婚した』 に描かれた「アメリカの物語」を読む：裏切りと 信念

著者	杉澤 伶維子
雑誌名	研究論集
巻	101
ページ	1-19
発行年	2015-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006025

フィリップ・ロスの『私は共産主義者と結婚した』に描かれた 「アメリカの物語」を読む*

— 裏切りと信念 —

杉 澤 伶 維 子

要 旨

戦後アメリカ史における主要な事件を背景とする、フィリップ・ロスの「アメリカ三部作」の一つ、『私は共産主義者と結婚した』に描かれた、登場人物たち3名（語り手ザッカーマン、主人公アイラ、アイラの兄でザッカーマンの高校時代の恩師マリー）の自己実現欲求とその結末を、マッカーシズムという直接の時代背景のみならず、「魔女狩り」、独立革命（建国）、内乱（南北戦争）といったアメリカ史における重大な事件に内在しているアメリカ的特質との関連から考察する。彼らのアメリカに対する理想／信念と裏切りを、政治的そして個人的レベルの両方から分析することで、アメリカ民主主義を支えてきたことばと、「アメリカ」を語ることの意義にも言及する。最終的には、作品執筆の背後にある20世紀最後の10年のアメリカ社会の変動をも考慮することで、現代アメリカに対する作家ロスの政治的・文化的・道徳的姿勢を明らかにする。

キーワード：アメリカ史、アメリカの物語、マッカーシズム、リベラリズム

はじめに

ユダヤ系アメリカ作家フィリップ・ロス（Philip Roth, 1933-）によって1990年代後半に執筆された「アメリカ三部作」（“American Trilogy”、以下「三部作」と略記）と呼ばれる三作品では、社会の周縁部に位置していた人間が、アメリカ人として自己形成を行う過程に歴史がどのような影響を及ぼすのか、という問いかけを共通のテーマとして、第二次世界大戦後のアメリカ史における主要な出来事を扱っている。ロスは、アメリカの現実と、作家の想像力との拮抗する関係を次のように述べている。

... the American writer in the middle of the twentieth century has his hands full in trying to understand, describe, and then make *credible* much of American reality. It stupefies, it sickens, it infuriates, and finally it is even a kind of embarrassment to one's one meager imagination. The actuality is continually outdoing our talents, and the

culture tosses up figures almost daily that are the envy of any novelist. (*Reading Myself and Others*, 167-68)

「三部作」は、アメリカの現実に巻き込まれた特定の人物の生涯を伝記として描いたフィクションであると同時に、作家の想像力を凌駕する驚くべきアメリカの現実をいかに作品化していくのか、という作家の挑戦に意識を向けたメタフィクショナルな作品でもある。

第一作目『アメリカン・パストラル』(*American Pastoral*, 1997、以下 *AP* と略記)では、1960年代のニューレフト (New Left) によるカウンター・カルチャー、第二作目『私は共産主義者と結婚した』(*I Married a Communist*, 1998、以下 *IMC* と略記)では、オールドレフト (Old Left) の残滓——リチャード・ローティ (Richard Rorty, 1931-2007) のことばを借りれば改革主義左翼 (Reformist Left) ——を追いつめる1950年代前半のマッカーシズムが背景となっている。第三作目の『ヒューマン・ステイン』(*The Human Stain*, 2000、以下 *HS* と略記)では、ローティが文化左翼 (Cultural Left) と呼ぶ新しい左翼系運動である、1990年代の「差異の政治」が俎上に載せられている。

「三部作」の第一作目 *AP* と第三作目 *HS* は、アメリカ現代史を検証する作品として高い評価を受け、批評家たちによって再三論じられてきたが、第二作目の *IMC* は出版当初、評価が思わしくなかった。その理由の一つは、ロスとの長いパートナーシップの後、三年間の結婚生活を送った女優クレア・ブルーム (Claire Bloom, 1931-) が離婚後出版したメモワール *Leaving a Doll's House* (1996) において、ロスとの私生活を暴露したことに対する報復行為としての出版と思われ、人々の関心がそのことに集中したことである。確かに、ブルームの本の内容に激怒したロスは、いったんは彼女を法的に訴えることも考えたが、コネチカット州のコテッジにこもり、怒りのエネルギーを執筆に向けたことが、2014年に Claudia Roth Pierpont によって出版されたロスの伝記に明かされている (228-30)。

この点についてのロスの真意はさておき、妻が夫、あるいは離婚した前夫との結婚生活を、出版という形で暴露するという個人的な裏切りは、*IMC* において、当時の政治的・社会的時代背景であるマッカーシズムと重なりあっていく。作品では、女優である妻によって *I Married a Communist* というタイトルの本¹⁾ を出版された主人公が、共産主義者としてブラックリストに載ったことで、破滅に追い込まれる経緯が描かれている。

「三部作」の中の他の二作品にはない *IMC* の強みは、『ゴースト・ライター』(*The Ghost Writer*, 1979) から『ゴースト退場』(*Exit Ghost*, 2007) まで30年近くに及ぶ一連の「ザッカーマン・シリーズ」における主人公及び語り手であり、作者ロスのオルターエゴでもあるネイサン・ザッカーマン (Nathan Zuckerman) の、少年期から青年期にいたる成長の過程がかなり詳しく描かれている点である。*AP* では、ザッカーマンは彼の高校時代を振り返っている

が、彼自身について言及することはほとんどなく、「ザッカーマン・シリーズ」の他の作品では、大人になってからのザッカーマンしか登場しない。したがって、*IMC* は少年期から青年期へと成長していくザッカーマンについての、貴重な情報を提供する作品となる。

また、『カウンターライフ』(*The Counterlife*, 1986)以降、ロスが創意を凝らしていた語りの構造という点からも、*IMC* は新たな手法を試みている。「三部作」共通の語り手ザッカーマンが、少年時代に直接主人公アイラ・リングولد (Ira Ringold) と接した時の経験と、アイラの兄で、ザッカーマンの高校時代の恩師マリー・リングولد (Murray Ringold) と40数年ぶりに再会した際聞いた話が交差しながら、アイラ像を結んでいくという形式である。

出来事は年代順には提示されておらず、マリーの語り時間が時間を前後しながら進行し、そこにザッカーマンの記憶が重なって増幅されるという形で、真相に近づいていく。したがって *IMC* では、主人公の生涯を語るナレーターであるマリーと、マリーの聞き手となるフレーム・ナレーターのザッカーマンの存在も、主人公と同様に重要である。アイラが俳優、マリーが英語教師、ザッカーマンが作家志望として、ことばに鋭敏な感覚を持つ彼らの当時の言動、及び後者二人が後に語る視点を通して、1950年前後のアメリカの社会状況が描き出されることになる。

1930年代、アメリカ社会の周縁部に置かれていたユダヤ系知識人の多くがマルクス主義に傾いたが、戦後の繁栄期にアメリカ社会の内部に自分たちの居場所を獲得した彼らは、次第に革命のイデオロギーを捨て去り、アメリカ固有の思想ともいわれるリベラリズムを信奉するようになった。ユダヤ系アメリカ人をラディカルからリベラリズムへと転向させることになったのは、経済的要因以外に、Arthur Herzberg が分析するように、マッカーシズムの恐怖、スターリニズムへの抵抗、ローゼンバーグ夫妻のスパイ容疑事件などがある (258, 294-95)。*IMC* は、特にユダヤ系の政治姿勢をテーマにして書かれた作品ではないが、主要登場人物たちの思想的傾倒や行動は、革命イデオロギーからアメリカニズムへという、戦後のユダヤ系アメリカ人の政治的転換をほぼ反映している。

AP が60年代、*HS* が90年代の政治的・社会的時代風潮を直接的な背景として、主人公の自己形成の経歴とその破滅を描くことで、アメリカ史に内在して現在に至るアメリカ特有の思想や理念に言及したように、*IMC* も、主人公を破滅にいたらしめる50年代前後を直接的背景としながら、個人と歴史の相克という「三部作」のテーマ²⁾を主軸に展開しており、他の二作品以上に直截にアメリカの政治思想に言及している。

にもかかわらず、*AP* と *HS* が、『プロット・アゲインスト・アメリカ』(*The Plot Against America*, 2004) とともに、アメリカを題材にしたロスの後期代表作として論じられることが多かったのに比べると、*IMC* は単独で扱われることが比較的少ない作品であった。しかし最近、語りの構造 (Masiero)、ザッカーマンのイニシエーション (Brühwiler)、政治思想 (Hutchison) などといった論点から *IMC* に対する新たな論考が発表されている。なかで

も Aimee Pozorski は、アメリカ建国の際のトラウマが、ロスの全作品に貫通していると主張、特に、*IMC* が単に赤狩りの恐怖を描いた作品ではなく、マッカーシズムを取り上げることで、建国の理念と「魔女狩り」というアメリカの歴史を浮き上がらせる作品とみなしている (67)。John Carlos Rowe は政治的視点から20世紀アメリカ文学の再検証を行い、リベラルで極端を嫌う近年のロスの主人公たちの姿勢が、中道を志向する Lionel Trilling (1905-75) のリベラリズムに類似していると指摘する (190)。

本稿では、アメリカ史におけるリベラル³⁾ とラディカルという、保守に対抗する二つの政治思想の流れを念頭に置きつつ、1950年前後の冷戦を背景とする *IMC* が、ユダヤ系アメリカ人のアイデンティティの問題を追及してきたロスによって、あらためて1990年代最後に執筆された意義を確認する。作品内で言及されたアメリカ史における革命的事件を視野に入れた上で、アメリカ思想の啓蒙と実践に不可欠なことばの役割に注意を払いながら、*IMC* の三人の主要人物たちが望んだ自己実現とその結末を、個人的必要性と歴史の偶然性という両方の視点から考察する。具体的には、それぞれの人生における個人的欲望と政治的関心、父と息子、理想／信念と裏切りなどを分析することで、作品に内蔵された「アメリカ」を解読し、アメリカに対するロスの政治的・文化的・道徳的姿勢を透視していきたい。

1. 「アメリカ」——「魔女狩り」から公民権運動前夜まで

当時高校生だったザッカーマンと、アイラを結びつけることになるアメリカ史における人物は、アブラハム・リンカーン (Abraham Lincoln, 1809-65) とトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) である。1948年秋、ラジオ声優アイラは、第16代大統領リンカーンに扮して「ゲティスバーグ・アドレス」と二期目の大統領就任演説を高校生たちに聞かせ、また奴隷制が主要な論点となった「リンカーン＝ダグラス論争」を再現するため、マリーが勤務する高校へ招かれていた。身長198センチという長身のアイラはその風貌がリンカーンに似ていることから、彼はリンカーンを演じることで人々の喝采を集めていた。この日、ザッカーマンはマリーの家の外を通りかかって偶然アイラと出会ったのだが、たまたま図書館に返却するためにザッカーマンが持っていた、ハワード・ファースト (Howard Fast) の『市民トム・ペイン』 (*Citizen Tom Paine*, 1943) がアイラの注意を引く。

イギリス軍を恐れ、終始圧倒されがちであったアメリカ革命において、民衆の力を結束させる重要な政治パンフレット『コモン・センス』 (*Common Sense*, 1776) を出版したペインの才能は、マリーが説明するように、「大義を英語で明確に表現したこと」、「革命のための言語を見つけ、偉大な目的のためなことばを見つけたこと」(27) である。ペインは高等教育を受けたこともなく、人生のどん底を経験したコルセット職人であり、出版後も、アメリカ独立後

も、一庶民であったことを描き出した歴史小説『市民トム・ペイン』はベストセラーとなった。ファーストは、戦場の野営地で夜ペインが原稿を執筆すると同時に、兵士たちがそれを読み上げる様を描写している。下河辺美智子は、「そこ『『コモン・センス』』に記された『言葉』は、理解されるために読まれたというよりは、革命という行為を行なうかけ声のように、音読された」(254)と、独立革命においてことばを発生することの重要性を指摘している。

リンカーンも同様にセルフ・メイドマンであったことは周知であるが、アメリカの分裂を防ぎ、人々を鼓舞して南北戦争を戦い抜くためのレトリックとしての歴史に残る名演説やディベート術などに見るように、リンカーンは文章構成能力、論述力、話術などに傑出した言語能力を備えていた。ドリス・グッドウィン (Doris Kearns Goodwin) は、リンカーンの政治手腕に焦点を当てた伝記 *Team of Rivals* (2005) において、演説におけるリンカーンの言語能力を、「リンカーンのことばに対する生来の注意深さと正確さ」(255)、「より簡潔で雄弁な用語への信念」(586)、「預言者にふさわしい雄弁」(699)、と表現している。

ペインとリンカーンは、独立と内乱という国家的危機、しかもどちらも戦いが長期化して人々の結束を維持することが極めて困難であった戦争において、人々の士気を高め鼓舞するためにことばという武器を最大限に利用した二人であった。彼らはともに庶民の出身で、常に大衆とともにあろうとしたという共通点がある。不合理な抑圧を排除し人権を守るため、ペインによって言語化された革命の理念は、その後「建国の父たち」によってアメリカ国家成立の礎となり、南北戦争という危機を経て奴隷制が廃止され、その不備は明らかではあったが、一応人権は全アメリカ国民へと拡大されることになった。歴史上の革命的事件は優れたことばの達人によって崇高な理念に高められ、民主主義として人々に浸透していった。

しかし、当然のことながら、南北戦争によってアメリカの民主主義が完成したわけではなく、むしろ急速な資本主義の発展によって貧富の差が拡大し、社会改革の必要性の高まりとともに、政治的ラディカリズムが誕生する。1948年には、既存の二大政党では吸収しきれない人々の要求を実現しようとして、ヘンリー・ウォレス (Henry Wallace, 1888-1965) によって第三党が結成された。ウォレスは、「国民健康保険、組合の保護、労働者のための給付手当」など、「彼独自のニューディール政策」(30)を要求した。さらに、アメリカ史における大統領候補としては唯一人、人種差別への徹底した抗議姿勢を貫く“courage and integrity”(30)を持つ人物であったが⁴⁾、特にそのことが少年ザッカーマンの心をとらえた。

以上のように50ページほどの第1章は、アイラとマリーとの関係を通して得た、少年ザッカーマンの政治的思想形成の過程を説明するとともに、アメリカ史における主要な事件にも言及している。Pozorski は、ロスは作品内でペインとリンカーンに何度も言及することで、アメリカの起源が現代の出来事にトラウマとして存続していることを示している、と主張する (67)。

独立、そして内乱、と約百年ごとに革命が国家を更新していくとするなら、次にアメリカを

待ち受けている革命は、20世紀半ばに起こるべく、労働者を解放するための共産主義革命になるはずであった。1950年代前半、アメリカは共産主義革命を恐れて反共ヒステリーに陥り、「裏切り」ということばが時代の代名詞とも言われた、マッカーシズム旋風が吹き荒れることになった。

デイヴィッド・ハルバースタム (David Halberstam) は、この反共ヒステリーを引き起こした上院議員ジョセフ・マッカーシー (Joseph McCarthy, 1908-57) を、*The Fifties* (1993) において次のように描写している。アイルランド系で貧民街出身のマッカーシーは、大衆は表向き顔の下に憤りや恨みをたぎらせていることを、身を持って知っていた。彼は、聴衆を「オーケストラを指揮するかのよう」(51) 巧みに操作し、非難・告発・脅迫によって人々の恐怖心をかき立てて、瞬く間にアメリカ全土を反革命勢力で満たしていった (49-59)。

作品内でマリーが分析しているように、そもそもマッカーシズムとは政治ではなく、アメリカの大衆を楽しませるために行われた娯楽であり、共産主義を問題にしているのではなく、見せしめ裁判を含む劇場型愛国主義運動であった。マッカーシーは恥辱の娯楽性を理解しており、民衆のための公的娯楽としての道徳的恥辱が国家の起源に存在していた17世紀に、我々を引き戻したにすぎない (284)。チャドウィック・ハンセン (Chadwick Hansen) は *Witchcraft at Salem* (1969) において、「魔女狩りは、共同体の大衆が、現実であれ想像上であれ、自分たちが悪意にさらされていると感じたとき、無実の者と有罪の者とを区別する能力を失って初めて起こるものである」(227) と警告を発しているが、17世紀に端を発する「魔女狩り」の伝統が、20世紀半ばに、「愛国主義」の言語を借用して巧みに発声するマッカーシーという役者を得て甦ったのである。50年代前半のアメリカが特異な時代だったというより、そのルーツをアメリカの起源に遡り、それを反復しようとする現象が露わになった時代であった。

結局、共産主義革命はアメリカには起こらず、政治及び経済体制は自由主義国家として存続する。従来、アメリカにはヨーロッパにあった封建制度が存在しなかったため、また、ニューディールのように政治が改革主義的福祉国家をめざしたため、社会主義革命を必要としなかった、という見解が広く認められている理由である。実際にアメリカにとって次の「革命」的変革となったのは、1960年代のカウンター・カルチャーであった。

アメリカにはヨーロッパ諸国にはない重要な問題が存在していた。奴隷制に端を発する人種問題である。作品の三人の主要登場人物は、黒人差別がアメリカの最たる不正義であるという認識で一致している。アイラは、「この呪われた場所 [アメリカ] を転覆するのは、我々の黒人の扱い方、労働者の扱い方だ。この国を転覆するのは共産主義者ではない」(126) と、労働問題とともに黒人差別を問題視している。少年ザッカーマンは、アメリカの黒人に対する不正義を憤って、人種問題への理解を示していた大統領候補ウォレスを支持する。マリーは黒人に対する寛容の精神と責任を貫き通すことで、(本論の4節で述べるように) 最終的に精神的致命

傷を負うことになる。

Catherine Morley は、ロスがアイラの容貌をリンカーンに類似させたのは、国民の心情形成に決定的な、アメリカの人種関係の考慮の必要性を示すためであると主張している (111)。作品内では、ザッカーマンがウォレスの選挙運動に参加した際、アフリカ系の俳優ポール・ロブスン⁵⁾ (Paul Robeson, 1898-1976) に出会ったことになっているが、Morley は、アイラのキャラクターが、リンカーンやペインよりむしろロブスンに類似していること、アイラが黒人たちと親しい関係にあることを指摘して (111-12)、*IMC* の根底に人種問題が存在していることへ注意を促している。

以上のように、第1章で言及されているペイン、リンカーン、ウォレス、マッカーシー、さらにはロブスンという歴史的人物をつないでいくと、*IMC* は、アメリカがおよそ100年ごとに経験した歴史上の事件——17世紀の「魔女狩り」、18世紀の独立革命、19世紀の内乱——を想起させ、さらに、次の100年目の革命的出来事となった公民権運動を予感させるかのように、アメリカ最大の問題である人種問題をも提示している。60年代のカウンター・カルチャーを扱った作品と言われる前作 *AP* は、ヴェトナム反戦運動に焦点を当てており、公民権運動にはほとんど言及していない。*IMC* は、あたかも「アメリカ」がもう一人の主要登場人物であるかのように、「魔女狩り」から公民権運動前夜にいたるアメリカ史における主要な事件を意識して書かれている。

2. 少年ザッカーマン：“Little Tom Paine”

作品は、以上のようなアメリカ史にマッカーシズムを位置づけした上で、そこに特有な現象である裏切りを描いているが、登場人物に焦点をあてて読むと、*IMC* は実は個人的な裏切りの物語でもある。特にザッカーマンについては、少年期から青年期にいたるザッカーマンが「父」を求め、そして「父」を裏切る物語である。

「筋肉と聡明な頭脳」(1) を持ち、献身的に教育に携わる英語教師マリーは、女性教師にはない「男性的な権威」を持った「男らしい男」(2) であり、当時高校生であったザッカーマンにとって特別な存在であった。マリーが「英語という言語への尊敬」(13) とともに高校生たちに教えたのは、「人間社会では考えることが最大の transgression」であり、「クリティカルな思考に究極の subversion がある」(2) ということであった。男性性と知性を兼ね備えるマリーは、足治療師の父親からは得られない刺激を与えてくれる存在で、少年ザッカーマンにとって代理父であった。だが、アイラの登場によって、ザッカーマンはアイラへ傾倒していく。

1948年の大統領選において、民主党を離れて第三党を結成したウォレス支持という点で、ザッカーマンとアイラの絆は強くなるが、このことが、ザッカーマンと父との対立を引き起こ

すことになる。少年ザッカーマンが父の反対を押し切ってラリーに出かけた時のことを、語り手ザッカーマンは、「リトル・トム・ペインは、父をお払い箱にして裏切るしかなかった」(32)と、少年の成長過程に起きる必要な裏切りとしてとらえている。その後引き続いて起こった「息子」ザッカーマンをめぐる父とアイラの闘いも、結果はアイラの勝利であった。「彼[父]の顔には裏切られた傷が刻まれていた」(106)と、語り手ザッカーマンは振り返っている。高校生のザッカーマンは、父の庇護を離れて自立した「アメリカ人」として成長していく過程において、政治的導き手となるアイラを代理父として選んだのである。

二度の夏をデラウェア州にあるアイラのキャビンで過ごしたザッカーマンは、そこでアイラによる様々な教育を受ける。アイラから車の運転を習い、初めての性交渉を体験する。労働者たちに紹介されて話を聞いたザッカーマンは、アメリカの理想とは異なる差別の現実に憤り、労働者たちの生活を描くラジオドラマの脚本を書き始める。高校生のザッカーマンは、芽生え始めた彼の文学的才能を、社会の不正義を告発するという政治的目的に向けようとしていた。

だが結局、アイラによるザッカーマンの教育は長くは続かなかった。大学生になるとアイラの影響力は次第に減少し、シカゴ大学で文学の博士論文執筆中のレオ・グラックスマン(Leo Glucksman)がザッカーマンの次の代理父となり、アリストテレス、キルケゴール、ベネデット・クローチェ、トマス・マン、ドストエフスキーなど、古今東西の偉大な文学の世界へとザッカーマンを誘う。“Politics is the great generalizer, . . . literature the great particularizer, . . .” (223)で始まり、政治は一般化をめざし、規律・組織を重視、科学的であろうとするが、文学は個別化を目指し、混沌・複雑・矛盾を許し、順応を拒否するものである、と説く1ページ半にわたるグラックスマンの発言は、以下のトリリングの有名な見解を反映している。⁶⁾

To the carrying out of the job of criticizing the liberal imagination, literature has a unique relevance, . . . because literature is the human activity that takes the fullest and most precise account of variousness, possibility, complexity, and difficulty. (Trilling xv)

グラックスマンは政治と文学の根本的な違いを明らかにして、真剣な作家になろうとするなら政治的思想・主義のために書いてはならない、と天職としての作家の真の任務をザッカーマンに示す。結局、ザッカーマンはグラックスマンによって、彼の文学的才能が政治活動や肉体労働によって枯渇することから救われたのである。ザッカーマンの転向は、社会的テーマを離れて、精神分析などを用いた内面探求を目指す思索的作品を発表していた、当時のユダヤ系作家の流れに一致する。

1956年当時、偏狭なユダヤ・コミュニティの伝統的規範にとらわれている父と決別して、「精神的父」を求めて高名なユダヤ系アメリカ作家I・E・ロノフのもとを訪れた、『ゴースト・ラ

イター』以前のザッカーマンが、少年期から青年期にかけて、次々と代理父を乗り換えることによって成長を遂げていった様子が、*IMC*において明らかにされる。このように、ザッカーマンは、十数年間親の慈愛に包まれて育てられた後、血縁に拘束されない新たな疑似父子関係を何度か選び直したのである。彼らは世界を航行していく方法を教える師匠であり、やがてその教えとともに順に投げ捨てられ、消えていく運命にある“adopted parents” (217) であった、と語り手は振り返っている。

3. アイラ：“Everyman’s Communist traitor”

アイラ自身の代理父は、軍隊時代に知り合った鉄鋼労働者で共産党員のジョニー・オデイ (Jonny O’Day) である。アイラとマリーの父親は、マリーがザッカーマンに語るのを拒んだほど問題を抱えた人物だったらしく、リンゴルド兄弟は父性を知らずに育てている。愛情を受けて育ったザッカーマンとは異なり、アイラのように早くに孤児になってしまうと、友綱が断ち切られた状態なので、たちどころに何かに全面的に身を投じてしまいがちである。「母と父がいないと、巧妙な操作や影響力に屈しやすくなる——ルーツを失うとすべてに対して脆弱になってしまう」 (358)、と『プロット・アゲインスト・アメリカ』で述べられている状態である。代理父となったオデイによる共産党教育を受けたアイラは、ユートピアのヴィジョンに惑わされ、たやすく共産主義を受け入れ党员となった。

代理父によるユートピア・ヴィジョンのみならず、さらに、アイラは結婚によっても自分を作り変えていく必要があった。*AP* ではユダヤ系三世の主人公スワードことシーモア・レヴォヴ (Seymour (Swede) Levov) がアイルランド系カトリックの女性との結婚、*HS* ではパッシングしていたアフリカ系主人公コールマン・シルク (Coleman Silk) がユダヤ系女性との結婚によって、ともに出自に拘束されない自己を完成させようとしたのと同様である。後にマリーによって明らかにされるように、16歳にして殺人を犯していたアイラは、彼の中にある狂暴な性質を抑えなだめるために、家族を必要としていた。ザッカーマンを「息子」として教育しようとしたのもそのためであった。

女優イヴ・フレーム (Eve Frame) との結婚は、共産主義とは相いれない贅沢を余儀なくされるものであったが、アイラは、「彼女との間に子どもが欲しい、家、家族、将来が欲しい。人々と同じように夕食をとりたい……自分自身の家族とテーブルを囲んで」 (114)、という願望を抱いた。家庭を持つことによって、彼の残虐性が穏やかになるはずであった。実はイヴ自身が、イディッシュ語しか話せない貧しいユダヤ人両親のもとハヴァ・フロムキン (Chava Fromkin) として生まれ、出自を隠して非ユダヤ人との数回の結婚を機に社会的上昇を果たし、自己変革を遂げてきた。結婚と家族による自己変容願望という点では、二人は同質の間で

あった。スードとコールマンが子どもを持つことで自己創造を完成させた（と思われた）のに対して、子どもを持ちたいというアイラの希望は、イヴと、彼女が前夫との間にもうけた娘シルフィード (Sylphid) との強固な絆の抵抗によって妨げられる。

イヴがアイラとの結婚生活よりも娘シルフィードとの関係を大切にしたこと、アイラがシルフィードの女友達との間に性的関係を持ったことなどにより、彼らの結婚生活は崩壊していった。しかしすでに三回の結婚に失敗していたイヴは、スターである自分が普通に結婚に失敗したことを認めるわけにはいかず、「私は夫を共産主義によって失った」と人々に訴え、結婚の失敗を特別なものとしなくては気がすまなかった。そういったイヴの気持ちを巧みに利用して、シルフィードに対するイヴの弱みにつけこんで脅迫したのが、共和党下院議員グラント夫妻 (Bryden & Katrina Grant) で、イヴの著作とされる *I Married a Communist* は、実はグラント夫妻によってゴーストライトされたものであった。

結局のところ、アイラの凋落は彼の政治信念によるものではなく、結婚という私的な領域での失敗が、「赤狩り」という公的な出来事にすり替えられていたのである。聖書から始まりシェイクスピアにいたる文学作品に見るように、そもそも裏切りは、いつの時代にもあまねく存在していた人間に固有な特性である。“Every soul its own betrayal factory.” (262)、とマリーは文学作品に言及しながら主張する。しかも、「個人的問題をイデオロギーに貢献しようとする、個人的なことはすべて押し出され捨て去られ、イデオロギーに役立つ部分だけが残る」(261)、と説明する。戦後アメリカでは、イヴの裏切り行為に代表される、政治の時流に便乗した「個人的裏切り (personal betrayal)」、公私混同の「汚い裏切り (nasty things)」が横行した (264)。

皮肉なことに、国家への裏切り者として排除されることになったアイラこそ、アメリカへの信頼と希望を強く抱いていた。ところが、歴史的人物としてのリンカーンを演じるだけでなく、現代に出現したリンカーンとしてアメリカ民主主義を説くことで、大衆民主主義の希望の具現化であったアイラは、今度は、大衆を代表する民主主義的コミュニスト (“popular-culture Communism,” “democratic Communist,” “the personification of Communism,” “the personalized Communist for the nation” (282)) としてレッテルを貼られてしまう。1948年にスパイ容疑で告発を受け、その後有罪判決により投獄された政府高官アルジャー・ヒス (Alger Hiss, 1904-96) に代わる、いやそれ以上に、身近な “Everyman’s Communist traitor” (282) として、アイラはいともたやすく反共運動のターゲットに祭り上げられていった。

一方、アイラとジョゼフ・マッカーシーには共通点があった。アイラはユダヤ系、マッカーシーはアイルランド系だが、ともに貧民街の出身で、大衆の気持ちを熟知していた。アイラは、アメリカ民主主義の金字塔リンカーンや、歴史的愛国者を演じながら改革主義思想を広めようとし、反対にマッカーシーは、非難・告発・脅迫によって聴衆の恐怖心をかき立てて、瞬く間にアメリカ全土を反革命勢力で満たした。大衆の民主主義の顔であったアイラは、集団ヒステ

リーに陥ったアメリカ民衆が必要としていた「裏切り者」の十字架を背負わされたにすぎない。

アイラが演じた改革主義的左翼運動も、マッカーシーが扇動した反共運動も、正反対の方向をとりながら、実は、アメリカ史における主要な出来事——前者は革命と内乱、後者は「魔女狩り」——における愛国主義の言語を借用する形で行われたものである。50年代前半のアメリカが特異な時代だったというより、そのルーツをアメリカの起源に遡り、無意識のうちにそれを反復しようとする現象が露わになった時代であった。と同時に、アメリカ社会にとって次の革命的変革期となった、60年代カウンター・カルチャーの胎動期でもあったことを、作品は、アイラを始めとする登場人物の人種問題への強い関心を描くことで予感させている。

4. マリー：“Decent American Principles”

以上のように、イヴの裏切り行為を安易に時代の流れに帰することなくその本質を見極め、アイラの自己形成とその失敗を総括し、マッカーシズムという時代潮流を冷静に分析して語っているのは、現在90歳のマリーである。引用符で始まるマリーの証言とコメントは作品の大半を占めるが、このマリーの視点が、*IMC* という作品全体の一貫した座標軸となっている。

IMC 出版当初、ロスとブルームの結婚が素材に使われていることが話題となったと、本論の導入部で触れたが、実は、むしろマリーに実在のモデル Bob Lowenstein がいることを、ロスは最近になって告白している。⁷⁾

Bob was the model for a major figure in my novel “I Married a Communist,” a book I published in 1998 recalling the anti-Communist period I mentioned earlier and that savage, malicious mauling that people like Bob suffered in those years from the teeth and the claws of the scum then in power. (*NYT* April 20, 2013)

ローエンスタインはロスが中学一年の時の担任教師で、フランス文学の博士号を持ち、第二次世界大戦に参加、マッカーシズムの時代には6年間教職を奪われた経験があった。卒業後40年の歳月を経てローエンスタインと再会したロスはすぐに意気投合し、コメントを求めて *AP* の最終原稿を彼に読んでもらっている。ローエンスタインをマリーのモデルにする際、“I tried to remain true to the force of his virtues, as I perceived them” (*NYT* April 20, 2013) と、彼の優れた美德がマリーの人物像の中心となっていることを述べている。

小説では、40数年の歳月を経て再会したマリーが彼自身について最初の夜に語ったことは、弟アイラがブラックリストに載ったため、非米活動委員会に召喚され教職を追われたこと、法廷闘争を経て復職するまでの6年間、掃除機のセールスマンをしていた1950年代のことである。

マリーがこの時受けた苦難は、彼もまたマッカーシズムの犠牲者、より正確にはグラント夫妻の政治的陰謀と、アイラとイヴの結婚の失敗の影響を被った者であったことを示している。しかし実は、マリーにとっての本当の苦難はマッカーシズムではなかった。

6日間マリーが語り続けた最後の夜、ザッカーマンは彼を宿泊先まで車で送っていくのだが、その際、マリーにとって致命的な事実が明かされる。ザッカーマンが生まれ育った街ニューアークは60年代に急速に治安が悪化、住人たちの多くは町を離れ、そのあとには貧しい黒人たちが流入、マリーたちは通りで唯一の白人家庭となっていた。退職までの10年間、マリーは誰も引き受けようとしなない黒人生徒の高校で教え、二度も襲われながら引越そうとはしなかった。マリーは彼の信念 (principle) を守ったのである。もはや “decent American principles” (12) が通用しなくなった時代にも、彼は「裏切らない」という信念を守り続けた。経済的・社会的に恵まれないニューアークの黒人たちに対して、教師としての責務を放棄すること、すなわち「裏切る」ことができなかったのである。

しかし、その「裏切らない」という信念に固執したがゆえに、結果的に彼は妻Dorisを「裏切る」ことになる。Dorisは仕事から帰る途上、強盗に殺害された。

Myself with all my principles. I can't betray my brother, I can't betray my teaching, I can't betray the disadvantaged of Newark. . . . And so who I betray is my wife. I put the responsibility for my choices onto somebody else. Doris paid the price for my civic virtue. . . . When you loosen yourself, as I tried to, from all the obvious delusions—religion, ideology, Communism—you're left with the myth of your own goodness. Which is the final delusion. And the one to which I sacrificed Doris. (317-18 強調筆者)

彼が自ら選んだ責任、すなわちその地域での教職を全うするという civic virtue は、妻の死をもってその対価が支払われたことになる。マリーの話聞き終えたザッカーマンは、並外れた高校教師であることを選んだマリーこそが、彼が生きた時代と場所の動乱を避けることができず、弟アイラ以上に歴史の犠牲者であったことを知る。

5. 語り手ザッカーマン：“Beware of the utopia of isolation.”

マリーは「シェヘラザードの称号」(262) に値する語りを夜ごと続け、闇の中でマリーが語る6日間、ザッカーマンはひたすら「耳」(321) になることに専念して、彼独自の解釈をほどこすことはなかった。作家は彼の想像力を上回る途方もないアメリカの現実に圧倒される、という本論冒頭に引用したロスの発言に呼応するかのよう、*IMC* では、ザッカーマンはマリー

から聞いた思いがけない出来事の話の再現と、彼自身の体験に基づいた語りには徹している。と同時に、聞き手であるザッカーマンが現時点のマリーの発言を受け入れ、マリーに近い意見や価値観を共有していることを意味しているとも考えられる。ザッカーマンも共有し、作品の座標軸ともなるマリーの視点、それは“decent American principles” (12) である。Elaine Safer はマリーを、「古いタイプのアメリカン・リベラリズムに対するロスの賛辞」(105) とみなしている。

この作品の登場人物の中でもっともすぐれたバランス感覚を持ち合わせ、政治的には極端には走らず、家庭でも仕事でも良心的に行動してきたマリー、それゆえ60歳代のザッカーマンは今回話を聞いて、改めて親近感を抱くことができたのだが、最後の夜、これまで見えなかったマリーの弱点が浮き上がってくる。彼の civic virtue への固執が結果的に妻を死に追いやった事実を、マリーは——おそらく意図的に——最後までザッカーマンに明かそうとはしなかった。ザッカーマンはマリーの生き方に、以下のようにコメントを加える。

You control betrayal on one side and you wind up betraying somewhere else. Because it's not a static system. Because it's alive. Because everything that lives is in movement. Because purity is petrification. Because purity is a lie. (318 強調筆者)

実は、ザッカーマンが危険視するのは裏切りではなく purity である。責任や civic virtue を全うすること、リベラル・ヒューマニズムに従って行動することでさえ、一途に遂行すれば同じく purity を求める極端な行為となりえる。Debra Shostak は、「自らを惑わすこととなるリベラル・ヒューマニズムの遂行、荒廃していくニューアークから脱出することを拒む彼自身の信念への固執」によって、マリーが結果的に妻の殺害を招いてしまった結末が、ザッカーマンがマリーから学んだ「小説の中心となる歴史の教訓」であると論じている (251-52)。Pozorski は、「イデオロギー、モラル、職業、民族においてさえ、purityへのオブセッションが、いかにトラウマを伴う裏切りを導いてしまうか」(60) についての小説であると断じている。

以上のように、最終的にザッカーマンがマリーを客観的位置から批判的に眺めることができたように、マリーもまたザッカーマンに対して批判的な判断を下している。ニューイングランドの大学町アシーナから離れた山間のコテージで、孤立した生活を送っているかつての教え子ザッカーマンに対して、

“... Beware the utopia of isolation. Beware the utopia of the shack in the woods, the oasis defense against rage and grief. An impregnable solitude. ...” (315)

“*Your* aloneness. ... I'm surprised to see you out of the world like this. It's pretty damn

monastic, the way you live. . . you're still a young man by my count, much too young to be up there. . . ." (320)

と最後の忠告を与えて去って行く。ザッカーマンはこれまで維持してきた静かな自分の生活がかき乱されることを恐れて、深夜3時にもなろうとしていたのに、老いたマリーを彼のコテージに泊めるといふ申し出ができなかったのである。

このコテージは、4年前ザッカーマンが60歳の時、人々から離れて一人で住むために購入したものである。それはかつて、1949年と1950年の夏に一週間ほど滞在した、デラウェア州にあったアイラのキャビンを思い起こさせるものである。ルソーやソローが独立と自由を求めて森の中に住んだ小屋、東洋の賢者たちが死を迎えるために老いの日々を過ごす山奥の小屋を連想させる。だがそれとともに、オデイが下宿していた部屋や、流浪のレーニンが一時的に住んでいたチューリッヒの部屋と同様に、罰と規律を思い起こさせるものでもあった。執筆のためであれ、老いと向き合うためであれ、極端に孤立した生活を送ることは、これも *purity* を求める行為となる。

この後小説の最終シーンでは、ザッカーマンが星の輝く夜空を眺めながら、すでに亡くなった事件の関係者たち一人一人を思い出している。子どもの頃、亡くなった人たちは空の星になって永遠に輝き続ける、と教えられていたからである。裏切った者も裏切られた者も、名もない一般の人々も、共産主義革命の指導者も、反革命を率先した者も、天空ではそれぞれに燃え盛る炉になっている。そしてその二か月後には、マリーも夜空の星の一つになったことがつけ加えられ、“The stars are indispensable” (323) という一文で小説は閉じられる。

この少々感傷的な終わり方に対して、いささかの戸惑いを感じないわけでもない。しかし、ザッカーマンが空想するように、死亡した人々がすべて星になるのであれば、そして夜空の星が星条旗を表しているとするなら、アメリカが無数の「不可欠な」個人によって作られ支えられている国であることを暗に示唆していることになる。個人がそれぞれに尊重されながら孤立せずに集合することで、国家が形成されていることを象徴しているのではないだろうか。最終シーンは、作品の背景というより登場人物そのものでもあった「アメリカ」の原点ともいえる姿の表象への、ザッカーマンの郷愁を帯びた肯定的確認ととらえることができよう。

おわりに

アイラは改革主義的左翼思想に傾倒し、マリーはリベラルな考え方を奉じていたが、両者とも、基本的にはアメリカ建国の礎となった思想・理念に敬意を持っていた。ローティは、以下のように「アメリカの物語」を通して国家への誇りを持つことの重要性を説いている。

Those who hope to persuade a nation to exert itself need to remind their country of what it can take pride in as well as what it should be ashamed of. They must tell inspiring stories about episodes and figures in the nation's past—episodes and figures to which the country should remain true. Nations rely on artists and intellectuals to create images of, and to tell stories about, the national past. (*Achieving* 3-4)

アイラはリンカーンや歴史上の人物を演じ、マリーは彼らのスピーチの力強さと美しさを生徒たちに教えることで、下河辺が主張する、「口承文学のように暗唱され、復唱され」る「アメリカという物語」(258-60)を教化することに積極的に寄与していた。リングルド兄弟は、程度の差はあるものの、それぞれ俳優・教師として、敬意を持ってアメリカの理念と思想を人々に伝えようとする、「リベラルな改革主義者」であった。改革主義的左翼を経て多様性を容認するリベラリズムへというのは、30年代から第二次世界大戦を経て50年代へと、当時の多くのユダヤ系が通った軌跡でもあった。

直接的にそして個人的には、アイラは妻によって裏切られ、マリーは妻を裏切ることになったのだが、ともに50年代および60年代という時代の流れに脚をすくわれた。リングルド兄弟は、いわば彼らが信じていたアメリカによって裏切られたのである。青年ザッカーマンだけが政治から文学へ転向、すなわち個人の“variousness, possibility, complexity, and difficulty” (Trilling xv)を描く作家となることで代理父を裏切り、自己確立に成功した。

そのザッカーマンが四半世紀以上を経て、歴史的視野から個人の人生を語ることでアメリカを描く作家として、広い意味での「政治」に戻ってきたのが「アメリカ三部作」である。建国の理念・思想に基づいて、リベラルな改革主義を奉じるリングルド兄弟に対する少年ザッカーマンの尊敬と親近感、執筆時のロス自身の、当時の彼らの政治的・道徳的姿勢への共感でもある。ザッカーマンがリングルド兄弟の人生を綴るその背後に、伝統的リベラリズムを過度に批判するラディカルな近年の傾向に対する、ロスの警戒心を透かし見ることができる。

第一に、政治的なことと個人的なことの混同、特に個人的な欲求を政治的な事柄に偽装して利用してしまうことへの批判である。イヴがアイラとの結婚の失敗を共産主義に帰したことに對するマリーの非難は、80年代および90年代のラディカル・フェミニズムのスローガン「個人的なことは政治的である」に対する、ロスの不快感を反映しているとも解釈できる⁸⁾。

第二に、パラダイム・シフトによって人種に関する概念が大きな変化を見せる中で、ロスは、60年代の公民権運動に先駆けて、黒人問題について誠意ある態度を貫こうとした人々を描くことで、人種へのアプローチが偏りがちな近年の傾向を警戒したとも読むことができる。リングルド兄弟のアフリカ系への姿勢は、ユダヤ系アメリカ人が、旧世界のユダヤ・コミュニティにおける社会正義の伝統と、アメリカで養われたリベラルな信念に基づいて、黒人と連帯して公

民権運動を共に闘おうとしたことの前兆でもあり、マリーの悲劇はその後の両者の訣別をも暗示している。

第三に、政治における極端なイズムに対する懸念だけでなく、文化や道徳といった人間の行為すべてにまつわる領域においても、過剰や純粋であること (purity) を忌避し、相対的に物事をとらえ、バランスを維持しようとするロスの基本的姿勢である。このあらゆる事象における純粋性への警戒心は、言語・道徳・共同体など、すべては偶然性の産物であると考えるローティの基本思想 (*Contingency* xvi, 60-61) に通底し、多文化主義の行き過ぎを戒め、本来の意味における多様性を容認し、他者への寛容を貫くりベラルな精神を改めて擁護するものである。

90年代の文化戦争を経験し、保守主義でも文化左翼 (= 差異の政治) でもない中庸を選び取ろうとするロスの姿勢は、次作の *HS* において、特に「ことば狩り」に代表されるポリティカル・コレクトネス批判、というはっきりした形で作品化されている。また一方で、アメリカ建国の理念を謳うことばへの無邪気な信頼が招く悲劇や、時として為政者によって悪用される危険性を描いたのが、1940年前後を背景とする『プロット・アゲインスト・アメリカ』である。このように *IMC* 執筆以後、ロスは、アメリカの理念への敬意とともに、アメリカが個人を裏切る可能性があることを、ことばという観点から一貫して描いていくことになる。

IMC は、自由主義を擁護するという愛国主義的ことばが大衆を惑わし操作した戦後の事件を、建国と内乱を牽引したペインとリンカーンが持っていたことばのパワー——「アメリカの物語」——を想起させながら語っている。と同時に、「アメリカの物語」としてアメリカ史に内在してきた思想・理念が過剰になる危険性を、90年代の過激な社会・政治を経験した作家の視点から描き直している。

政治的左右両極端を排除し、アメリカ建国の理念に鑑みながら、civic virtue や decent American principles といった伝統的道徳への敬意を表して、ロスは「アメリカの現実」から彼の想像／創造力を駆使して、フィクション作家として「アメリカという物語」を紡いだのである。ラディカリズムはもちろんのこと、たとえリベラリズムであっても、建国の理念であっても、あるいは善意に基づく行為であっても、特定のことばや思想・信念に固執することには、裏切りに勝るとも劣らない危険が潜むことを、作品は警告している。

*本論は、2014年6月14日に関西外国語大学において開催された、日本アメリカ文学会関西支部例会における口頭発表に、大幅な加筆・修正を行ったものである。

注

- 1) ロスの作品タイトルと区別するため、作品内でイヴが出版した本の題名はそのまま *I Married a Communist* とし、ロスの作品名は *IMC* と省略する。
- 2) 「三部作」の共通テーマが個人と歴史の相克であることについては、拙論「フィリップ・ロスの『ヒューマン・ステイン』における個人と共同体——怒り、汚れ、浄め——」と、「Philip Roth の *American Pastoral* における盲目性と不可視性、想像力と創造性」を参照。
- 3) リベラリズム及びリベラルという用語はその多義性のゆえに定義は極めて難しく、アメリカでは、歴史的コンテキストによってその解釈が変化してきた。従来、政治・経済問題における保守主義とラディカルリズムの中道として位置づけられていたが、冷戦体制の中で社会主義革命への対抗としての要素が強調された。しかし、ソ連崩壊による冷戦の対立軸の消滅とともに、近年リベラリズムの議論は、国内における文化的・道徳的問題に移ってきている。特に多様性をめぐる議論では、リベラルは保守とラディカルの両者から批判を受け、リベラルとしてのアイデンティティが揺らいでいる。
- 4) Norman Markowitz は *The Rise and Fall of The People's Century* (1973) において、ウォレスは選挙運動期間中、人種差別主義者から卵を投げつけられても臆せず、黒人の選挙権登録を推進し、segregation に反対する主張を行ったことを記している (290)。
- 5) Paul Robeson は、ニュージャージー州出身のアフリカ系で、運動選手、俳優、歌手、公民権運動家などとして多方面で活躍した。1948年の大統領選挙ではウォレス応援の先頭に立ったが、ソ連訪問や反体制的発言のため、非米活動委員会から共産主義者と名指しされ、映画界から締め出されていた時期がある。長期にわたり政治的攻撃にさらされ、晩年は心身の不調に苦しみ、孤立した生活を送ることになった (*African American National Biography*. Vol. 9. 506-09)。
- 6) Ross Posnock による指摘 (51-52)。
- 7) 2013年4月に執り行われた Lowenstein の葬儀で、ロスが述べた弔辞からの引用である。
- 8) Debra Shostak を参照 (252)。

引用・参考文献

- Bloom, Claire. *Leaving a Doll's House: A Memoir*. Boston: Little, Brown, 1996.
- Brühwiler, Claudia Franziska. *Political Initiation in the Novels of Philip Roth*. New York: Bloomsbury, 2013.
- Fast, Howard. *Citizen Tom Paine*. New York: Grove, 1943.
- Goodwin, Doris Kearns. *Team of Rivals: The Political Genius of Abraham Lincoln*. 2005. London: Penguin, 2009.
- Halberstam, David. *The Fifties*. New York: Fawcett Columbine, 1993.

- Hansen, Chadwick. *Witchcraft at Salem*. 1969. London: Hutchinson, 1970.
- Herzberg, Arthur. *The Jews in America: Four Centuries of an Uneasy Encounter: A History*. 2nd ed. New York: Columbia UP, 1997.
- Hutchison, Anthony. *Writing the Republic: Liberalism and Morality in American Political Fiction*. New York: Columbia UP, 2007.
- Markowitz, Norman D. *The Rise and Fall of the People's Century: Henry A. Wallace and American Liberalism, 1941-48*. New York: Free Press, 1973.
- Masiero, Pia. *Philip Roth and the Zuckerman Books: The Making of a Storyworld*. Amherst: Cambria, 2011.
- Morley, Catherine. *The Quest for Epic in Contemporary American Fiction: John Updike, Philip Roth and Don DeLillo*. New York: Routledge, 2009.
- Pierpont, Claudia Roth. *Roth Unbound: A Writer and His Books*. London: Jonathan Cape, 2014.
- Posnock, Ross. *Philip Roth's Rude Truth: The Art of Immaturity*. Princeton: Princeton UP, 2006.
- Pozorski, Aimee. *Roth and Trauma: The Problem of History in the Later Works (1995-2010)*. New York: Bloomsbury, 2011.
- "Robeson, Paul." *African American National Biography*. 2nd ed. Vol. 9. New York: Oxford UP, 2013.
- Rorty, Richard. *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America*. Cambridge: Harvard UP, 1998.
- . *Contingency, irony, and solidarity*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Roth, Philip. *American Pastoral*. 1997. London: Vintage, 1998.
- . *The Ghost Writer*. 1979. *Zuckerman Bound: A Trilogy & Epilogue*. New York: Farrar, 1985. 1-180.
- . *The Human Stain*. 2000. New York: Vintage, 2001.
- . *I Married a Communist*. 1998. London: Vintage, 1999.
- . "In Memory of a Friend, Teacher and Mentor." *New York Times com*. 20 Apr. 2013. New York Times, Web. 11 June 2014.
- . *The Plot Against America*. Boston: Houghton, 2004.
- . *Reading Myself and Others*. New York: Vintage, 2001.
- Rowe, John Carlos. *Afterlives of Modernism: Liberalism, Transnationalism, and Political Critique*. Hanover, NH: Dartmouth College Press, 2011.
- Safer, Elaine B. *Mocking the Age: The Later Novels of Philip Roth*. Albany: State U of New York P, 2006.
- Shostak, Debra. *Philip Roth—Countertexts, Counterlives*. Columbia: U of South Carolina P, 2004.
- Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. London: Secker and Warburg, 1950.
- 下河辺美智子『歴史とトラウマ——記憶と忘却のメカニズム』作品社、2000年。
- 杉澤伶維子「フィリップ・ロスの『ヒューマン・ステイン』における個人と共同体——怒り、汚れ、浄め

フィリップ・ロスの『私は共産主義者と結婚した』に描かれた「アメリカの物語」を読む

——」新英米文学会 *New Perspective*. 182 (2006年2月)、75-82頁。

----「Philip Roth の *American Pastoral* における盲目性と不可視性、想像力と創造性」同志社女子大学英語英文学会 *ASPHODEL*. 48 (2013年7月)、82-95頁。

(すぎさわ・れいこ 英語国際学部教授)